

◆幹事より

木島竜吾

幹事（岐阜大学）

第8回大会が終わり、岐阜は急に秋になりました。既に会期中のにぎわいが懐かしい気持ちになります。

岐阜大会を運営、開催するにあたり、個人的に最も心配していたことは、発表数、来場者数でした。参加者の方々には、岐阜駅周辺の活力や規模を感じていただけたかと思いますが、例えば昨年の会場へのターミナルである東京新橋駅の一日乗降客数約100万、来年の京都駅の約60万人と比較しても、JR岐阜駅は約5万人と、規模的には比較になりません（日本一は新宿の440万人だそうです）。そのために、アクセスの良い岐阜駅近隣で開催すること、プレ懇親会等に特色を出して魅力を増すことなどの工夫をこらし、そのかいあってか、講演発表件数、来場者数ともに、過去最多となりました。また、それらのイベントもおおむね好評であったとの感触を得ており、まずはほっとしています。

今回は、岐阜大学の教官だけではなく、名工大など近隣の大学、特色あるメディアアートの学校であるIAMAS、及び産業施策の面からVR全般にバックアップをいただいている岐阜県の総合力によって開催が可能となったと思います。また、学会事務局、協賛企業にも、人的な面を含め、多大な御協力をいただきました。参加者の皆さんと、御協力頂いた皆さんに心より感謝いたします。

◆プログラム担当より

山田宏尚

プログラム副委員長（岐阜大学）

今大会は、どちらかといえば地方の部類に入る岐阜の地での開催ということで、当初は十分な講演数が集まるのかどうか心配されたが、ふたを開けてみると予想を上回る179件もの発表が集まり、盛況のうちに終わることができ、ほっとしている。

講演数が多かったことから、従来の3室並行でプログラムを組んでみると、スケジュール的にかなり厳しいことが分かり、最終的には部分的に並行4セッションとすることで何とか対応できた。当初は3室並行を念頭に部屋割りを考えていたため、受付のための部屋を途中から講演会場

として使うことになり、事務局の方にはご迷惑をおかけすることになってしまったが、皆様のご協力ですべてのセッションを無事に終わることができた。発表件数は年々増加の傾向にあるようなので、今後はあらかじめ部屋数に余裕を持って準備を進める必要があるものと思われる。

さて、プログラム委員会の重要な仕事に、セッション振り分け作業があるが、これは第3希望までの希望セッションのデータがあったため、エクセルのソート機能を使って比較的効率的に構成できた。しかし、実際にプログラムを組んでみると、座長や講演者の希望調整などの細かい作業がいくつか生じた。これについては、大会幹事の木島先生および大会事務局の貞岡さんのご協力で何とか対応することができた。また、研究委員会よりプログラム委員会に加わって頂いた皆様、学会事務局の田中さんをはじめとするスタッフの方々には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。



発表会場の様子

◆機器展示担当より

望月 茂

機器展示担当（ソリッドレイ研究所）

第8回岐阜大会は3月から、実行委員会の本格的な活動がスタートし、4月以降は毎月1回の定例委員会となりました。仕事との兼ね合いや距離的な問題もあり、毎回出席とはいきませんでした。企業展示の活動としては、会場の下見から始まり、5月中の出展案内送付先企業のリストアップ、6月初旬の案内状の送付という流れで進りました。さらに、6月下旬に行われた産業用バーチャルリアリティ展(IVR2003)で、大会長の川崎先生、幹事の木島先生と各企業ブースへ直接誘致活動を行いました。7月上旬より、企業からの申し込みが始まったものの、予想